

深求・川にちなんだ万葉集の歌

万葉の川心

第7回

松田 園子

下総国の歌〈東歌〉

足の音せず 行かむ駒もが

葛飾の真間の継橋 やまず通はむ

(巻第一四 三三八七)

夕陽の落ちる頃、小さな町がいつもと違うあわたださに踊り出している。はやる気持ちを押えるように、浴衣の上からしゅつと帯を締める。

河原では、多くの人が集まり始めているだろう。夏の夜に咲く花火は、老若男女一人ひとりの心に一瞬の夢を焼きつけて散る。あの一瞬が人を呼び、町を踊らせている。

下駄に足をすべらせて表に出た。なぜか早足になってしまふ。からころと響く音が少し恥ずかしいような気がして、足をゆるめた。その脇を少年たちが駆けていった。

「足の音を立てずに歩く馬が欲しい。そうしたらそれに乗って毎晩、やむことなくあなたのもとに通いたい。」この歌は木の継橋を渡るゆえに音が立ち、人目を引いて思うようにあなたに会えないという、男から女への相聞歌である。万葉集には「打橋」(両岸に板を渡す)、「石橋」(川中の自然石を利用)、「船橋」(船を浮かべてその上に板を渡す)などがでてくるが、入江の洲から洲へと板を継いで橋を渡した「継橋」はこの地に珍しく、名所になって歌に詠まれたと言われている。また継橋は、次々とやむことなく通うことを言葉から暗示させる、縁語の役目も果たしている。

むかし葛飾の真間に、手児奈とよばれる美しい娘がいたという。あまりにも多くの男性に言い寄られたために、誰をも選ぶことができずに入水し

て命を絶った「伝説の美女」である。手児奈とは手仕事をする女、おそらく朝廷に献上する布を織ったり、当時の女性の労働であった水を汲む仕事をした女たちのことだろう。その中でも際立って美しい娘の悲劇は、この地方に長く語り伝えられ、都人の高橋虫麿呂や山部赤人も長歌に詠んでいる。その「手児奈」のもとに通う想いと、自分の恋人に会いたいという想いが重なりあって、この歌は時代を経て多くの人々に愛されてきた。

下の写真は現在の千葉県市川市にある「真間の継橋」と呼ばれる橋とその歌碑であり、碑は江戸時代(元禄九年)に建てられている。「真間」とは崖のようにほとんど垂直な傾斜地をいい、万葉の頃の地形が地名として今もここに残っている。

橋からすぐの所にある弘法寺というお寺には、ひとつだけいつも湿っていて乾いたことのない石があり、「手児奈の涙石」と呼ばれていると地元の人々が教えてくれた。

河原での花火も佳境に入り、最後の盛り上がりを見せていた。打ち上げる時の爆音が地を伝って体を揺らし迫力を増す。眼前には夜空いっぱい光の花弁が広がり、すぐ上に舞い降りてくるように思われた。「この一瞬を止めておきたい。」すぐに消えたとわかっていても、思わずそう願ってしまう。恋にも人生にも似て、花火は一夜の夢を華やかに彩った。

